

デカルト「方法序説」を読む

谷川多佳子 岩波現代文庫/学術 313 (2014; 原書 2004)

1. デカルトの生涯と「方法序説」

9 デカルトは「方法序説」の第一部末で学校の勉強を否定的に総括し、数学は留保するものの、書物の学問を捨て去るという大胆な宣言をします。文字の学問、人文学は捨てる。医学、法学に対しても否定的です。こうして、書物による学問、学校の学問を捨てて旅に出るのです。

10 ドイツに行く前に、オランダのブレダで駐屯している時に、イサク・ベークマンと知り合う。これはデカルトに大きな影響を与えます。ここでさらに、数学を武器にして自然を解明するという構想を得ます。

18 「省察」は西洋哲学では形而上学の古典として有名で、ラテン語で書かれました。「方法序説」はフランス語で書かれ、当時としては例外です。宮廷や貴族の間ではフランス語が用いられていましたが、学術論文や哲学論文はほぼ全てラテン語でした。デカルトは、女性にもわかってもらうためにフランス語で書いた、と手紙で述べ、一般の人にわかってもらうためにフランス語で書いた。

20 「哲学原理」は1644年にでます。デカルト自身が言うように、自分お哲学を教科書風に述べています。朝日出版社に全訳があります。

21 デカルトは哲学全体を一本の樹にたとえ、根が形而上学、幹が自然学とします。そしてこの樹には3本の枝があり、それは機械学、医学、道徳です。道徳とはモラル、生き方です。

2. 「方法序説」の読まれ方、魅力

32 哲学の著作に見当たらない稀なケースとして、ここでは「私が」とか「私は」が、頻繁に述べられ、しかも肉声の響きを持っている。—中略—デカルトの「私」は肉声であって、しかもスコラという大きな建物を壊す強い力となっている。その上「私」は一般性を持っている。それが「方法序説」の魅力であると、ヴァレリーは語ります。

37 18世紀ヴォルテールは次のように批判します。デカルトは初めは幾何学を熱心に勉強し、いろいろな技術を発明し、「屈折光学」などのしっかりとした仕事を残したけれども、彼は幾何学を捨ててしまった。あとは数学をやらなくなり他の学問に向かうが、後になるほど間違いが多い。結局、その体系は間違いだらけの体系になってしまっていて、しかもその体系に固執する精神、頭の固い小説でしかなくなってしまう。だから学問のない連中には本当らしく見える。よく引かれるヴォルテールの批判は辛辣です。

38 デカルト哲学への批判は、まず数学的な論理中心主義に抗するもので、ヴィーコによると当時の教育全体がそうになっている。今で言えば、理系中心主義、しかも数学的な論理だけでやっている。そうすると文系の学問が無視され、排除されてしまう。記憶や想像力の養成が欠落し、論理主義的な真か偽かで割り切ってしまうような人間を育てることになる。その嘆かわ

しい状況の根本がデカルト思想である。

39 フッサールはデカルトはエゴを思惟実体として出発点にしてしまったと批判する。
40 レヴィ・ストロースは「人類学の創始者ルソー」という講演で、デカルト主義をヨーロッパ
植民地思想の根幹として批判します。デカルトのコギト・エルゴ・スムの哲学は、いわば自
己中心的な世界像で、他者や、別の文明を認める視点がなく、ヨーロッパの植民地主義の根
底となった。

57 ロディス・レヴィス「デカルト伝」(未来社 1998)

3. 書物の学問を捨てて旅に出る…

60 第1部冒頭の文章は有名です！「良識はこの世でもっとも公平に分け与えられている」人権宣
言や独立宣言にもつながり近代民主主義の基礎とされています。

65 数学の基礎はあれほど揺るぎなく堅固なのに、もっと高い学問が何もその上に築かれなかつ
たのを意外に思った。

4. 学問の方法と生き方のモラル

83 多くの人よりも一人によって作られる方が完成度が高く、さらに、真理への接近も一人の人
間の理性による。

90 こうして当時の論理学、解析、台数という三つの学問お長所を捉えながら、しかも欠点を改
革しながら次の4つの規則を作ります。

(1)「私は明証的に真と認めるのでなければ、どんなことも真として受け入れないこと…疑
いを差し挟む余地の全くないほど明晰かつ判明に精神に現れるもの以外は、何も私の判断の
中には含めないこと」—明証性の規則

(2)「私が検討する難問の一つ一つを、できるだけ多くの、しかも問題をよりよく解くため
に必要なだけの小部分に分割すること」—分析の規則

(3)「私の思考を順序にしたがって導くこと。そこでは、最も単純で最も認識しやすいものか
ら始めて、少しずつ、階段を上るようにして、最も複雑なものの認識にまで昇っていき、自
然のままでは互いに前後のjん女がつかないもの間にさえも順序を想定して進むこと」—
総合の規則

91 (4)「すべての場合に、完全な枚挙と全体にわたる見直しをして何もみおとさなかったと確
信すること」—枚挙の規則。

95 住んでいる家の建て直しを始める前には、…工事の期間中、居心地よく住める家をほかに
都合しておかなければならない。それと同じように、理性が私に判断の日決定を命じている
間も、行為においては日決定のままで止まることの内容、そしてそのときからもやはりでき
る限り幸福に生きられるように、当座に備えて、一つの道徳を定めた。

—中略—

三つの「格律」が述べられます。

- (1) 「私の国の法律と慣習に従うこと」
- (2) 「自分の行動において、できる限り確固として果敢であり、どんなに疑わしい意見でも、一度それに決めた以上は、極めて確実な意見である時に劣らず、一貫して従うこと」
- (3) 「運命よりむしろ自分に打ち克つように、世界の秩序よりも自分の欲望を変えるように、常に努めること」。

5. コギト，二元論，自然

- 115 考えることが、世界のあるなしに関わらず、私の存在を保証する。「私は一つの実体であり、
その本質ないし本性は考えるということだけであって…。
- 116 実体とは、デカルトによれば、他のものに依存することなく、それ自体として独立に存在する
ものです。そうした実体として考えられるのは、本来、神ですが、デカルトは神が創造した
実体として、精神と物質という二つの実体を認め、両者は異なった実体として峻別され、
二元論が構成されます。
- 117 神の存在の第一の証明は、私が不完全であるとすれば、完全¹なるものの観念がすでに前提
118 されている。その観念の起源は私のうちではなく、私よりも完全な本性の内にあるはずだ、
というものです。
- 121 神を魂(精神)の存在が証明されると、神の存在を前提して初めて、我々の知識が確実なもの
となります。
- 122 ここで明晰判明の規則と神の存在との間に循環があることが、指摘されています。神について
明晰判明な観念を持つことから神の存在を証明したのに、神が存在するゆえに明晰判明な
観念がある、というのは循環ではないか？デカルト自身は、現在あることを明晰にとらえる
場合と、過去において明晰に捉えたことを想起する場合とを区別することによって—前者
の知識は神の保証を必要としない—答えています。いずれにせよ、私の知は、完全で無限な
存在者、すなわち神に由来していることが確認されて初めて、真であることが保証されるの
です。
- 123 精神と神の存在が知れら大麻、ここで夢における会議を取り除くことができます。—中略—
結局のところ「理性の明証性」のみが、真を教えるのです。
- 129 「世界論」では m 図物質においてアリストテレスの質的観念を取り除きます。「その物質の
かなには実体的形相や実在的性質などは一つもなく…」
- 130 デカルトにおいては、人間の知性は、感覚や想像力とは独立に機能しうる。神と精神の認識
も感覚や想像力でなく、知性によるものでした。こうした人間知性は、その内部に神の刻
んだ無尽蔵な数学的観念を有し、それに従って、物体の本質を規定しうる。そうして、実体的
形相という概念を取り払って、数学をモデルにした機械論を打ち立てます。
- 136 第5部の終わりにロボットのような自動機械と、本当の人間とをどう区別するかという問題

¹「完全」とはスコラ用語で、ものの有する積極的性質で、大小の程度がある。神は最も完全なるものと定義され、あらゆる完全性を自己の内に持つ。

をデカルトは立てています。

6. 「方法序説」と現代哲学

160 レヴィナスはフッサールが「デカルト的省察」で行った他者論を批判します。そこでの他者は、自我が自我のうちで構成する他者であり、単なる認識対象としての他者である、と。レヴィナスによれば、他者は自我のうちでは構成されない。他者は自我の外部から到来する。有限な私のうちに無限なもの「神」の観念を持つというデカルトの存在証明は、他者の存在のモデルとなります。他者なしには自己意識はなく、レヴィナスは、認識する自我が他者を、了解=包括してしまうこのとの問題を指摘し、他者を私に還元できないこと、外部から到来する他者が私を私として構成すること、外部から到来する他者との関係そのものが倫理であること…を語るでしょう。

161 エリザベトにあてデカルトはこう答えています。心身の結合は、精神と身体の実体から理論的に分析・総合されることはありえない。それは「原初的な概念」であって、原初的な概念は「それ自身によってのみ、理解される」。

162 しかし結局、心身の結合の問題については、自然学からも形而上学からも、理論的説明は閉ざされており、それ以降、哲学史において論理的難点として残ります。

現象学の方では、二元論そのものへの基本的取り組みが見られます。二元論は精神/物質、あるいは意識/身体というように捉えられますが、さらに、主観/客観あるいは主体/客体という近代認識論の基本前提にもつながります。フッサールは意識を、志向性つまり「何者かについての意識」と定式化して、意識と対象の基本的関係を指し示しますが、これは、意識と対象が完全に独立しているというよりも、相関関係の中にある両者が出会い、関係しあう、場のようなものを見るべきでしょう。そこには、主観/客観という基本前提を見直すための一つの方向が見えてきます。

164 メルロー・ポンティが目指したのは私たちの身体を通して、「生きられた世界」を記述することです。二元論は身体を内面なき所部分の総和とし、精神にとっての透明な対象としてしま
165 う。これに対して、「自己の身体を経験」が私たちに開示するものは、このような二元論ではない。身体は私たちが世界の中に存在していることを保障する媒介であり、世界に対するあらゆる運動、そして思惟を可能にする。そして私たちはあらゆる分析に先立って、世界と身体において絡み合い、そこに住み込んでいる、というのです。—中略—デカルト的なコギトに対しても、身体は、「私は考える」という人消化されたコギトに先立つものであり、それを統合するような「無言のコギト」なのです。

166 メルロー・ポンティは「省察」などにおけるデカルトの心身結合についての言及を取り上げ、外からの説明でない「人間経験の記述」に立ち返ったと高く評価しています。

172 長谷川真理子は「科学の目、科学の心」で、デカルトが感覚で認識できる世界と、そうでない科学の認識のようなレヴェルの世界とを区別したことを評価している。[C]これが現代科学観の躰きの元であろう。

173 ヴィトゲンシュタインの「私的言語の議論」まず観念があり、それに名をつけると擦れば、他人の言語は理解しえないことになる。他人の観念は知りえないから、自分の内的体験を自分だけのために書きつけたり口に出したりできるような言語は、その用法の「正しさ」について語ることが原理的にできない、従って、そうした言語の存在を考えることは可能ではない。

174 この議論によって、精神的なものと私的なものを同一視したデカルト的「思考」概念が反駁され、デカルト主義が決定的に論駁されたとする解釈があります。しかし、観念の土台が生得的なものにつながり、良識あるいは理性が、生まれながらに平等に万人に「分け与えられている」ことから、観念そのものが、共通的で普遍的になる可能性はあるでしょう。

終わりに

176 多方面からのデカルト批判、それでもなぜデカルトなのか。個々の問題解決能力には難点や限界があるとしても、問題提起の豊かさ、広さ、深さ、において、その哲学の偉大さが計られるのではないのでしょうか。